研究・イノベーション学会第36回年次学術大会／オンラインセッション＊挑戦する日本の学術誌

クラウドファンディングを利用した学術誌の創刊と運営

学術雑誌『メディウム』を例に

今関裕太

（江戸川大学基礎・教養教育センター助教）

Twitter: @imazeki_yuta

2021/10/29

自己紹介（Twitter: @imazeki_yuta）

専門は20世紀のアイルランド小説とメディア論

（今年度・来年度採択の科研費課題（21K19992）：
「アイリッシュ・モダニズムにおける小説と音響メディアの関係 」）

2014年３月	東京大学文学部英語英米文学専門分野を卒業
2016年３月	東京大学大学院人文社会系研究科英語英米文学専門分野で修士号取得
2016年４月	同博士課程に進学
2018年９月～	University College Dublin, School of English, Drama and Film 博士課程
2021年４月～	江戸川大学 基礎・教養教育センター　助教

〈第２部〉

人文学における研究成果・研究評価の共有媒体について

1. 現在の日本における人文系の学術雑誌の体制

2. 『メディウム』の査読体制 と今後の展望

1. 現在の日本における人文系の学術雑誌の体制

① 商業誌

発行頻度が高く、読者層も広い。一方で、公募制でない場合がほとんどで、原稿掲載のためには何らかのコネクションが必要。

② 紀要

基本的には研究室や学科単位で発行され、多くがウェブ上で無料公開されており、異分野間の交流が生じることもある一方、同分野・近接分野での交流や研究蓄積は困難。投稿資格も所属先や勤務先のものに限定される。

③ 学会誌

査読体制が充実している場合も少なくなく、専門性の高い議論の蓄積が生じやすい。多くの場合、会員にのみ投稿資格有り。年刊のものが多く、それに応じて投稿機会も年１～２回。また（一概には言えないが）投稿者・編集者・査読者間でのコミュニケーションが十分に行われない場合もある（※英語圏のScholarly Communicationに相当する分野の日本における手薄さ）。

⇒ 人文系の学術雑誌をめぐる以上のような状況に加え、（特に社会的立場の不安定な若手研究者が）短期間で多くの成果を出すことを求められるという状況、また、特定分野の範疇に収まりきらない論文が多く書かれるようになっている状況の中で、どのような性質の媒体が必要か。

2. 『メディウム』の査読体制 と今後の展望

① 会員制度や投稿資格を設けないことで、研究分野や立場のために生じがちな障壁を取り除く。

② 明確な査読規定のもとでシングルブラインド制の査読を行う（ただし、査読者の氏名は一覧化したうえで当該号に掲載）ことで掲載原稿の水準を確保する。

③ 以下のような投稿プロセスを設定し、投稿者・編集者・査読者間でのコミュニケーションの機会を確保すると同時に、投稿先の変更や内容修正の機会を事前に複数回確保する。

（1）約400字の内容案の提出 → 編集部／外部編集者からの応答（→ 更にやりとり）

（2）2,000字前後の構成案の提出 → 編集部／外部編集者からの応答（→ 更にやりとり）

（3）初稿の提出 → 編集部から査読者へ送付

→ 査読コメントを編集部で総合し査読規定に沿って結果を通知

→ 修正稿の提出 → 最終的な掲載可否・掲載形態を編集部で決定

2. 『メディウム』の査読体制 と今後の展望（続き）

（4）査読・審査結果に対して意見や疑問がある場合、投稿者と編集部（および査読者）で協議。（将来的にはこの部分も可視化したい。）

〈問題点〉

＊編集部の負担：査読規定や執筆規定の整備と検証・原稿募集・査読者の確保・投稿者とのやり取り・組版・校閲・経理・販売・宣伝・研究会の企画などを基本的に二人で行っている

＊有料販売ゆえのアクセス性

＊継続的な発行のための資金の確保と発行部数の調整

・『メディウム』はあくまで一つの実践例だが、どの学術誌も自らの機能や長所・短所を考慮し、投稿体制や査読制度の継続的な検討を行っていくことが重要。

・研究者は投稿者にも査読者にもなるが、編集者になること（それによって得られる経験をそうした検討に活かすこと）も必要だし、編集者としての仕事も学術的な成果の一部であることを周知していく必要がある。